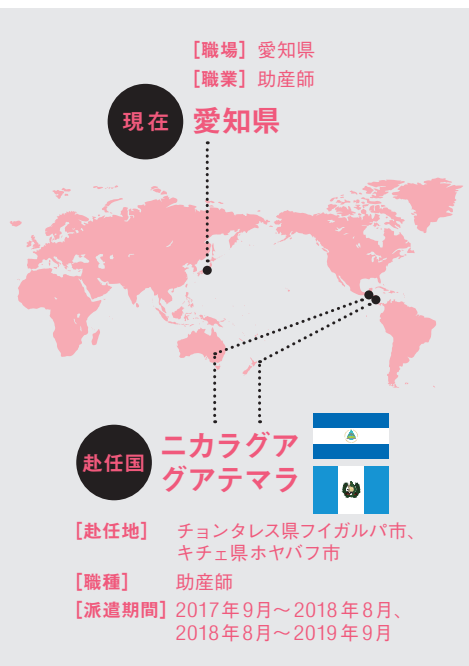




言葉の壁を越えて、多文化共生社会へ

上里 佳那子さん 医療法人森永産婦人科
Kanako Uesato

助産師の上里佳那子さんは、医療現場に留まらず、多文化共生社会の実現に向けて地域社会に深く根差した活動を目指しています。いつか自分で多文化共生の居場所をつくることを目標に、JICA海外協力隊（以下、JOCV）での経験と大学院での学びを活かして、日本で暮らす外国人のサポートを続けています。

多文化共生への 強い思いを胸に

JOCVでの経験を経て、大学院で研究を深めてきた上里さん。「日本で暮らす外国人が、子育てはもちろん、安心して生活できる環境を築きたい」と強い思いを語る。その思いは机上に留まらない。大学院修了後は助産師として勤務する傍ら、在住外国人の元に足を運び、NPO活動にも積極的に取り組んでいる。その原動力は、多文化共生への強い信念だ。在住外国人たちに寄り添い、言葉を交わす中で、表面からは見えにくいニーズや課題を肌で感じ取っている。

多文化共生に強い関心を抱くようになったのは、南米系の住民が多い地域で育ったことが背景にある。地元で助産師として働き始めた頃、搬送されてく

る外国人が日本語を理解できず、指差しでしか意思疎通し合えない状況にたびたび直面した。相部屋なのに誰とも話さず、独りで聖書を読んでいる外国人患者を見ては「言葉さえ通じたら」と無力感に苛まれていたという。

「振り返れば、子どもの頃から市内に多くの外国人が住んでいることは知っていました。なのに、地域全体で共に生きているという意識が希薄だったように思います」何年も住んでいる外国人が、



十分に日本語を理解できないのも、こうした多文化共生の問題が根底にあるのではないかと上里さんは考えるようになっていた。そんなとき、JOCVの募集が目に残ったのだ。

激動のニカラグアで 学んだこと

上里さんは、JOCVとしてニカラグアとグアテマラの二カ国に派遣された経験を持つ。「情勢悪化での移動でしたが両国の医療事情に触れることができたのは貴重な経験でした」

特ににわかに政情が悪化したニカラグアでの滞在は、上里さんに強烈な印象を残した。「デモが激化する中で、何気なくバリケードの写真を撮ったことで、スパイ容疑をかけられたことがあった」



ニカラグアにて 病院から遠方の妊婦さんたちが共同生活を送るCasa Materna（お産を待つ人の家）でマタニティヨガを実施



不安の少ない状態で妊娠、出産、子育てが出来るよう妊婦さんやその家族向けの教室を開催



小児蘇生法をみんなで学んでいる様子。多文化子育て支援サロンでは多国籍のお母さん達の学びや楽しみの場を提供している

市民生活にも危険が迫り、外国人への警戒心が強まっていた時期だった。この出来事によって、異国の地で暮らしていることを強く実感したのだという。そうした中でも、ニカラグアの人々は、常に上里さんを守り支えてくれた。

「賑やかな街から人影が消え、マチューテ（鈍の様な刃物）を抱えた人たちがうろつく様に。外国人の私には状況が掴めず不安でいっぱいだった」平和な日常が一変する様子を間近で体験した上里さん。「ニカラグアでの経験は、私に多くのことを教えてくれた。外国人支援の必要性、人と人との繋がり大切さ。出会ったすべての人々、経験したすべての出来事が、いまの私を形作っています」

「言葉の壁」の向こう側へ

中米二カ国で異文化経験を積んで帰国した上里さん。今度は逆カルチャーショックに悩むことになる。「音声翻訳機を使って、便（べん）は出ましたかと尋ねたら、（飛行機の）便（びん）と訳されたんです。使う側は正解が分から

ないので、だんだんと会話が噛み合わなくなる」こうしたトラブルはごく一部に過ぎなかったという。多文化共生のために用いられているものが、必ずしも当事者のニーズを満たしているわけではないというのは、自ら外国人という立場に身を置いたJOCV経験者だからこそ気がつく視点だ。

そんな折、JOCV経験者で愛知医科大学の坂本真理子教授による地域看護の取り組みと出会う。JOCV活動を通して、長い歴史に刻まれた文化や習慣を理解することは不可能だと知った上里さんは「だからこそ、知ろうとする姿勢が大事だと分かった」と、JOCV経験者向け奨学金事業『帰国隊員奨学金』を活用して、坂本教授がいる大学院への進学を決意した。

坂本教授に学んだことで「僻地に住む人々や子育てをする外国人との関わりを通して、国籍に関係なく健康的に安心して子育てをするにはどんな支援が出来るのか、考えを深めることができた」という上里さんは、現在、助産師として再び医療現場で活動をしている。不安な面持ちでやってくる外国人患者を受け

上里 佳那子さん プロフィール

2017年度2次隊・グアテマラ、ニカラグア・助産師。滋賀県出身。助産師として産婦人科や母体胎児集中治療室での勤務を経験した後、JOCVに参加。帰国後、帰国隊員奨学金を受けて愛知医科大学大学院看護学研究科に進学。現在、愛知県内の産婦人科に勤務する傍ら、多文化共生に関するNPO活動に従事している。

入れるたびに、社会還元の実践者としての坂本教授の姿や自身のJOCVでの日々を思い出している。「辿々しい私のスペイン語にも親身になって耳を傾けてくれた」心を通わせればなんとか意思疎通が図れることを知る上里さんは、日本での生活の厳しさは言葉の壁だけではないと指摘する。「バスの乗り継ぎ方など交通機関への馴染みのなさが外国人の足を医療機関からいっそう遠くさせていると思います」

“外国人”“日本人”の枠を超え、共に生きる社会の実現と、それを支える人になることを目指す上里さん。上里さんにとってJOCVは、ひとつの通過点に過ぎなかったのかもしれない。その生き方は、国際協力を志す若者たちに、覚悟と勇気を与えてくれるだろう。

上里さんへのエール！

愛知医科大学大学院
看護学研究科 教授
坂本 真理子さん



言葉の壁を超えて、共に生きる社会を目指して

上里さんとは看護学研究科修士課程のアドバイザーとして出会いました。大学院生というよりも同じJOCV経験を持つ若い友人に近かったかもしれませんが、もちまへの明るさと柔らかさでどこにでも馴染んでいかれる様子は、看護職としても異文化背景をもった人たちと協働していく上でも、かけがえのない資質だと思いました。どんな世界を切り拓いてくれるのかワクワクしています。